P 23

Lactobacillus plantarum による降下性壊死性縦隔炎の一例

[1] 日本医科大学　付属病院　感染制御部、[2] 東京医科歯科大学微生物免疫学教室

○根井 貴仁[1]、齋藤　良一[2]

降下性壊死性縦隔炎は頭頸部の感染（歯科領域 感染，咽頭後膿瘍，扁桃．周囲膿瘍など）が縦隔に波及する急性縦隔炎の一亜型であり、迅速で適切な処置を怠ると急速に重篤化し致命的となる。起因菌は主にレンサ球菌などのグラム陽性球菌と口腔内嫌気性菌であるが、今回起因菌として *Lactobacillus* spp.が考えられた症例を経験した。患者は 69 歳男性。近医より喉頭癌の疑いで当院耳鼻咽喉科へ紹介となったが、未治療の糖尿病を合併していることが判明。入院予約の後、38℃台の高熱が出現し、経口抗菌薬の投与を受けていたが改善を認めなかった。入院後、CT を撮影したところ頸部から縦隔にかけて低濃度領域を認め、降下性壊死性縦隔炎が考えられた。翌日、縦隔膿瘍を右胸腔側から胸腔鏡下で切開排膿を行った。膿汁のグラム染色で陽性桿菌を認め、培養でも陽性桿菌を検出したが同定は不能であった。検出細菌は最終的に 16s rRNA シークエンスと *recA* 遺伝子の同定により *Lactobacillus plantarum* と同定した。術中より広域抗菌薬の投与を行ったが、感受性試験よりアンピシリンに変更し投与を継続した。約 4 週間の抗菌薬投与後、喉頭癌に対し根治手術を実施し軽快退院となった。*Lactobacillus* spp.による感染症は現在まで菌血症、感染性心内膜炎、脾膿瘍などの報告はあるが、降下性壊死性縦隔炎の報告は皆無である。*Lactobacillus* spp.は有史以来より発酵食品の材料として我々の生活環境にとても身近な存在であり、現在においては probiotics としての医療応用性が指摘されている。しかしながら易感染性患者のみならず、健常者においても感染症の起因菌となるうる報告が幾つかあり、決して看過できない。当日はこれらをまとめて若干の文献を交えながら報告する予定である。【非学会員共著者】稲井俊太、横島和彦、中溝宗永（耳鼻咽喉科/頭頸部外科）、三上巌、佐藤明、岡本淳一、原口秀司（呼吸器外科）、園部一成（細菌検査室）

P 24

当院における尿路結石に伴う尿路閉塞による急性腎盂腎炎の検討

[1] 王子総合病院　泌尿器科、[2] 札幌医科大学　医学部　泌尿器科

○桧山 佳樹[1]、栗村　雄一郎[1]、市原　浩司[2]、橋本　次朗[2]、高橋　聡[2]

【目的】腎盂腎炎における起炎菌の各施設における薬剤感受性パターンを認識することは、Empiric therapy 時に使用する薬剤を選択するときに参考となるため重要である。当院における尿路結石に伴う尿路閉塞による急性腎盂腎炎、特にドレナージが必要と判断された重症症例における起炎菌および起炎菌の耐性化について retrospective に解析した。

【対象方法】2008 年～2011 年に尿路結石に伴う尿路閉塞による急性腎盂腎炎においてドレナージ術を必要と判断した 43 例について検討した。

【結果】年齢の中央値は 67 歳（36～89 歳）、男女比は 20：23、結石の左右比は 19：27（うち 3 例は両側）であった。結石の長径の中央値は 9mm（2～40mm）であった。41 例に尿管 Double-J(D-J)ステント、1 例に腎瘻、1 例に腎瘻と尿管 D-J ステントを留置した。経過中に死亡例は認めなかった。30 例において起炎菌が同定された。起炎菌として *Escherichia coli*（*E.coli*）を 15 株と最も多く認め、*Staphylococcus aureus*（MRSA 含む）を 4 株、*Klebsiella pneumoniae*、*Pseudomonas aeruginosa*、*Enterococcus faecalis* を各 2 株認めた。また、13 例においては抗菌薬投与前の培養が未提出などの理由に起炎菌を同定できなかった。*E.coli* においてキノロン系へ耐性を示したのは 1 株（7%）であった。多剤耐性緑膿菌を 1 株認めた。検出された起炎菌全株では第 3 世代セフェム系に 64%、第 4 世代セフェム系に 73%、β ラクタマーゼ配合ペニシリンに 76%、キノロン系に 82%、カルバペネム系に 88%で薬剤感受性を認めた。

【考察】本施設において起炎菌としては *E.coli* が大部分を占めた。感受性試験においてキノロン耐性の *E.coli* が 1 例(7%)にしか認めなかった。本施設においては、キノロン系は Empiric therapy 時に選択しても問題ないが、耐性化の危険性があることから、その使用には慎重であるべきと考えられる。

【会員外共同研究者】田口　圭介（王子総合病院　泌尿器科）